

Title	「神を仰ぎ、人に仕う」生き方を目差して：全学礼拝を守り続けた 40 年を振り返って
Author(s)	標, 宮子
Citation	キリスト教と諸学：論集, Volume24：127-135
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2756
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「神を仰ぎ、人に仕う」生き方を目差して

——全学礼拝を守り続けた四〇年を振り返って——

標 宮 子

過日阿部洋治大学チャプレンから全学礼拝懇談会の発題をしてほしい旨、ご依頼があり、短期大学時代の思い出を語ってくればよいとのことでしたので、お引き受けいたしました。

私自身は一九七三年に女子聖学院短期大学の国文科の非常勤講師となり、初めて宮原の地に降り立ちました。そしてその二年後の七五年に児童教育学科が創設され、藤田明先生や梅津迪子先生とご一緒に専任として赴任いたしましたので、非常勤時代も合わせると実に三十五年この地に通い続けたことになります。おそらく上尾キャンパスの最古参の住人の一人ではないでしょうか。

はじめは阿部先生のお言葉通り短大時代の懐かしい思い出を語るつもりで、私も編集の業に参画させていただいた『女子聖学院短期大学のあゆみ』を読み返しておりましたが、長年キリスト者として教育の業に携わってきたものとして、深い反省と大きな課題を投げられたオウム真理教問題を避けて通ることはできないと思い至り、そのことを含めてお話をさせていただきたいと考えました。まとまらない話になるかもしれませんが、お許しください。

はじめに今日の聖学院大学の礎がどのようにして築かれたのか、女子聖学院短期大学の歩みを振り返ることによってそのことを思い起こしてみたいと思います。

女子聖学院短期大学は一九六七年に創設されました。英文科一学科、入学生は百二十六名でのスタートでした。一期生の思い出でよく語られることは、畑の中にまるで豆腐のような白い建物（現在の一号館）が一棟あるだけの学校で、当時は宮原からの道路も整備されておらず、雨の日はぬかるんだ道を辿って通学しなければならないという有様であったようです。しかし開学当初から礼拝は週一回守られ、春と秋にはキリスト教講演会が開催され、クリスマス礼拝などの諸行事が行われました。まさに全学礼拝は四十年に亘って守られてきたのです。

初代学長の小田信人先生は牧師でありましたが、信仰は知識を学ぶことによって会得されるのではなく、霊的な感化によって体験されるべきもの、という信念の下に短大の運営を行い、それ故キリスト教を押し付けるような雰囲気はなく、教員も学生も職員もキリスト教的自由の伝統の中で家族的な触れ合いのある学風がকাশし出されていたということです。小田先生はアメリカの大学のように学生と教職員が生活を共にしながらキャンパスコミュニケーションを造りあげたいという願いをもっておられ、開学と同時に学生寮と教職員住宅を作り、ご自身も率先して学内に移り住み、当時の宗教部長、事務長のほかにも何人かの教職員が生活をともにしながら、キャンパス作りに励まれました。

翌年一九六八年には国文科が増設されました。またこの年には寮生の多くから母のように慕われた福田ソノ子先生が二代目の寮監となられ、一九九〇年に最後の寮生を送り出すまで、厳しくも行き届いた献身的な指導が続けられたのです。福田先生は寮生の生活上の指導だけでなく、緑聖伝道所の開設や、クリスマススのページエントの指導、図書館前のもみの木献金の発案など、学内のキリスト教活動を積極的にサポートしてくださったことで有名ですが、チャペル建設のために早くから学寮で祈りを捧げられ、一九八一年発行の同窓会の会報「緑朋」五号には、「学寮ではすでに十年來このための献金がなされている」と報じられています。つまり福田先生が寮監に就任してまもなく

からチャペルを求める祈りが寮生を中心に捧げられていたことが判明いたします。

一九七二年には宗教主任制度が導入され、小倉義明先生が初代宗教主任として就任されました。キリスト教的内実が深められ、組織や制度も整えられました。今日我々が建学の精神として掲げている「神を仰ぎ、人に仕う」は、一九七三年に行われた校舎の増改築の際に、第二代学長W・G・クレーラ先生によつて選ばれた小田先生の言葉です。この言葉が一号館の礎石に刻まれ、爾来それが建学の精神を表す言葉となり、聖学院大学に引き継がれたのです。ちなみに短大の終わりの頃には「神を仰ぎ、人に仕う」というモットーが現代の若者には分かりにくいのではないかとの意見が出され、短大の教育目標としてももう少し詳しく述べた文章を作成しました。短大教育の様子を記憶するため、ここに掲げます。

女子聖学院短期大学の教育は

キリスト教に基づき

まことの神を敬い

自由を得させる真理を求め

自己の使命を見出し

すべての人への愛と奉仕にすすんで生きる

人間の育成を目的とする。

この他短大から大学に引き継がれて今日に至っている行事（本文の中で言及していない）についても思いつくま

まに書き出しておきましょう。

軽井沢スクール

↓F・O

キリスト教と諸学の会

軽井沢修養会

↓夏のリトリート

新年研修会

教会と学校の懇談会

↓教会と大学の懇談会

公開講座

話を元に戻しますと、私が短大に赴任した当時全学礼拝は週二回、現在と等しく一時限と二時限の間に行われ、一号館の四階で守られておりました。そこは講堂として使用されており、起立すると椅子がばたんと閉じ、腰掛けるときにはぎーぎーきしむ音がして礼拝の厳肅な雰囲気損なうまいと苦労したものです。しかしその環境の中で、週二回の礼拝を守ろうと先生方も学生もよく出席していたという記憶がございます。

さてチャペル献金は小倉先生のもとに集まっていた宗教委員の学生を中心に七六年度生から自発的に行われましたが、それを知った各ゼミの学生やクラブが募金に加わり、七九年度生が卒業記念として二十万円あまりを献金したことで機運が一挙に盛り上がりました。その学生たちの熱意を汲みあげる形で、教授会において正式に取り上げられ、創立二十周年事業としてチャペルを建てる事が議され、一九八二年七月には教授会メンバー全員が募金発起人になることが諒承されました。その頃同窓会誌「緑朋」は、チャペル建設のニュースを頻繁に取り上げ、寄付

を寄せてくださった方々の名前を掲載し、当時の紙面を読み直すとその関心の深さと熱意のほどが伝わってきます。「緑朋」七号によりますと、チャペルの規模は六六〇平米（二百坪）、礼拝堂本体は二百席を確保し、できれば五十席くらいの小礼拝堂も欲しい、経費は二億円で、献堂は短大創立二十周年の一九八七年五月という計画でした。これには卒業生も率先して協力してくださり、あるものは毎月給与の中から一定の額を送ってくださり、またあるものは就職や結婚、出産の記念として捧げ、学生たちは学園祭で上げた収益の中から多くを捧げたのです。しかし完成に至るには当初の予定からさらに十七年の歳月が必要でした。それは一九八八年の四月に向けて聖学院大学の創設が計画され、法人全体がこのことに協力することになり、チャペル献金も一時その為に使用されたためです。

女子聖学院短期大学は一九九九年、最後の卒業生を送り出し三十二年の歴史を閉じました。短大生の悲願であったチャペルの完成はとうとう最後の卒業式にも間に合いませんでした。当時は何か割り切れない思いが心を占めておりましたが、今思い返すと、それは地上を歩むキリスト者の人生を象徴するかのような出来事であったといえましょう。さらに学生・卒業生・父母・教職員、女子聖短大に関わる全てのものが長い間心を合わせ祈りつづけ、結束することができたという体験は、なかなか得がたい良い思い出であったとも思えるようになりました。その思いは私だけでなく、おそらくこの業に参画したものの全てにとつて共通する忘れがたい思い出として心に刻まれているのではないでしょうか。誰から強いられたわけでもなく、自主的に喜びをもって母校のため神様のために捧げたのですから、自分がそのように生きることができたこと自体が喜びであり、感謝であったと思えるのです。その意味から短大三十二年の歩みは『女子聖学院短期大学のあゆみ』に記されているように「何もなかった、そして全てが与えられた」という感謝に集約できる歩みであり、さらにスクール・モットーの「神を仰ぐ」ため、皆が心を一つにして祈りをあわせた歳月であったと言い得ると思うのです。

さてその後の大学が設立されてからの二十年間は黒木先生の発題におゆだねして、残りの時間で私にとって忘れたいもう一つの事件について考えてみたいと思います。オウム真理教問題です。この事件は本学に直接関わることはありませんが、私にとっては強い衝撃を受けた出来事でした。有能な若者たちがオウム真理教というかくまで怪しげなカルト集団に心捉われたという事実に変なショックを受けたのです。それは若者たちがどれほど深く傷つき悩み、心の支えを希求しているかという事実を突きつけられた出来事でありました。若者たちの心の叫びに鈍感であった自らを反省するとともに、その希求を汲み上げることなく、自分は今まで何をしてきたのだという自責の念に苛まれた出来事であったからです。地下鉄サリン事件は、一九九五年三月のことですから、私がこの学校に奉職してすでに二十年がたっていました。私の学生時代、国立大学にも優れたキリスト者の先生方が何人もいらして、学生の尊敬と信頼を勝ち得る存在でありました。それに対して、その当時のキリスト教は、いや自分自身は学生たちにとっていかなる存在であったのか、鋭い反省を突きつけられたのです。このとき私は年齢的にも五十という歳に二、三年のうちに手が届くというときでした。もはや自分より年配の方々の責任にして「貴方たちは何をしてきたのか」と批判の鋒先を誰かに向けて済ますことのできない年齢に達していたのです。中学・高校時代をミッションスクールで学びキリスト教信仰の種をまかれ、同じ信仰に立つ大学で教育の業に携わることを喜びとし、使命と感じてきたものとして、深い反省と大きな課題を投げられた事件でありました。そしてその課題は今もって抱き続けている課題です。

この事件が起こった直後、社会全体も科学技術偏重の教育のあり方に疑問を呈し、哲学や倫理学を中心とする人文科学の見直しが叫ばれました。私は内心教育の流れが変わると、大きな期待を抱きましたが、当時はバブル崩壊後で不況が長引き、この事件の二年後には北海道拓殖銀行や山一證券等の金融機関が破綻しました。戦後最大とい

われる不況の嵐が吹き荒れたのです。その嵐に世間はあつという間に飲みつくされ、オウム事件の反省はたちまち忘れ去られ、大学進学を目差す生徒も世間も実学志向に立ち戻ってしまいました。

オウム真理教が多くの若者たちの心を掴むことができたのは、インド数千年の歴史の中で培われたヨーガの力によるものでしょう。そこで心と身体の癒しと安らぎが実際に与えられたという事実があればこそ教団があれほど力を持ち、浅原彰晃という人物に傾倒するものが続出したのだと思われます。キリスト者の目から見れば、オウム真理教の過ちは神ならぬものを神としたということに尽きると思いますが、しかしその反省に立つて多くの学生の関心がキリスト教に向けられたかと言うとそうではなく、キリスト教もオウム真理教も一緒くたにされ、宗教は怖い、ということをお口にする学生が少なくなかったことは、キリスト者として忸怩たる思いがいたします。

全学礼拝を守り続けた四十年を振り返るとこの会で、私がこの出来事を取り上げた理由の一つは、チャペル建設が本学の建学の精神の前半部分「神を仰ぐ」という生き方を体现する事例とするならば、オウム真理教の事件は、後半部分の「人に仕う」という姿勢のあり方を考えるヒントを与えてくれると思ったからです。オウム事件は「人に仕う」という精神の欠落が引き起こした出来事といえるのではないのでしょうか。オウムの信徒たちは一人ひとりが教祖に結びつきました。教祖と信徒の関係は、彼らにとつては一種の垂直次元の関係といえましょう。その教祖を中心に一見共同体の形成を目差しているかに見えましたが、しかし似非の垂直次元からは真の連帯や人に仕えるという姿勢は生まれず、横のきつなは本当は築かれていなかったことが最終的には暴露されたということでありましょう。私という存在の名前を呼んで、一人子主イエスを犠牲になさってまであがなつてくださる神様は、私の隣にいる人にも同じ目差しを注いでおられる。そのことを真に知る者は、「人に仕う」生き方に押し出されていくのではないのでしょうか。キリスト者として自分の生き方を考えるとき、「神を仰ぐ」という垂直次元の姿勢と、「人

に仕う」という水平次元の關係が調和的に正しく保たれているかどうかは、自分の生き方を吟味し反省するときの一つの大切な指標となるのではないでしょう。長年の夢であつたチャペルが与えられた今こそ、私たちは「神を仰ぎ、人に仕う」という生き方をあらためて目差すときではないかと考えた次第です。

現代の若者は心身ともに脆弱で病んでいるものが少なくないといわれます。あるいは日本文化学科の学生たちの特徴かも知れませんが、内気で他者との關係性を正常に築けない学生たちが増えています。家族とあるいは友達とよい人間關係を結べなくなっている若者が目につきます。授業の中でグループを作りましょうといわれると、気分が悪くなってしまう学生もいます。彼らは大学での学びを通して、自己実現を希求していますが、本当の意味で自己実現を果たすには、他者と關係を切り結ぶことが必須であることを理解していません。

チャペルが与えられ、神を仰ぐ礼拝の場が整えられた今こそ、学生たちが他者とともに生きる姿勢を意識して養うことの必要を、私は痛感しています。一人の学生の例を紹介したいと思います。彼は心身ともに病を抱えた学生でしたが、彼の祖父が病に倒れ、続いて祖母が入院し、病状が悪化しました。父親は単身赴任で、母親が祖母につききりになったところで、彼が施設にいる祖父の相手をする事になったのです。はじめはもっぱら電話の応対役を果たしていたようです。ゼミが終了すると、彼は研究室にやつて来て、家の様子を逐一話して帰るようになります。その後お祖母様は天に召されましたが、連れ合いをなくしたお祖父様の悲しみを和らげるため、彼が引き続き対応役を続けています。彼はこの役割を担う中で見違えるほどに成長を遂げています。母親や祖父を思いやる心が培われ、最近では車椅子で祖父を街中に連れ出し、彼の身体もずいぶんたくましく健康になりました。と同時に我々が弱者と共生することのできる社会を目差すためには何が必要かと、社会的関心も深まり、世の中を見直す鋭い視点も養われています。

人は自分の内面を見つめているだけでは、自己の存在の意味をなかなか掴みえません。しかし他者との関係の中に生きるとき、神様が私たちをこの世に送りだしてくださった使命と役割を自覚できるようになるのではないのでしょうか。神を仰ぐ礼拝の場が守られている本学でこそ、あのオウム教団のように歪んだ姿でなく、真の意味で人に仕える交わりの尊さを模索し、学んでいくことができるのではないのでしょうか。

まとまらない話になりましたが、私自身が全学礼拝を守り続けた三十五年の歩みの中で、教えられたこと、感じたことをお話いたしました。